

「地域ネットワーク支援」平成20年度採択企画
「国際交流都市函館の地域ネットワークを活かした科学文化の醸成」

平成20年度 年度報告書

平成21年3月31日

(提案機関名) 函館市

(代表者名) 市長 西尾正範

(目次)

1 . 概要	3
2 . 当該年度の実施状況	4
3 . 当該年度の成果	5
4 . 外部評価	6
5 . 今後の課題と展開	6
6 . 資料編	9

1. 概要

1.1 企画概要

本企画では、観光都市函館の地域ネットワークを活かして、市民の日常生活の中に科学を文化的活動として根付かせ、市民や子どもの科学技術への関心を喚起する。また観光、交流都市函館である地域性を活かし、函館を訪れた人々にも波及していくことを目指す。

そのために以下の3つを実施する。

(1) 観光と科学技術理解増進活動が融合した情報ネットワークの構築とその運営

科学技術理解増進活動に関連する各種地域イベントの情報を収集し、発信する情報ネットワーク「サイエンス・ツアー函館(仮称)」を構築し、現存の観光に関連する各種イベントの情報ネットワークとの融合を図る。

(2) 科学フェスティバルの実施と公空間を利用した科学イベントの実施と情報端末の開発

科学技術理解増進活動に関連するイベントの集合体である「サイエンス・フェスティバル函館 20XX(仮称)」を毎年開催していく。初回開催を、2009年に予定されている函館開港150周年記念イベントの開催時期に合わせる。また、各種団体や個人などによって年間を通じて実施されている科学技術理解増進活動の充実のみならず、ユビキタス技術を利用して、駅やバスなどの公空間へ進出し、子どもや市民に対し、新たな接近を試みる。

(3) 科学・地域コミュニケーションを推進する人材の育成

科学コミュニケーションを推進していく人材である、科学コミュニケーターおよび、イベント・コーディネータを、上述の1、2の活動を実施する中で実践的に育成していく。育成にあたっては、函館市内の8つの高等教育機関の連携組織「キャンパス・コンソーシアム函館」が中心になり、セミナーやワークショップを実施する。

1.2 企画の背景・経緯

近年わが国では、子どもの理科離れだけでなく、大人の科学技術離れが深刻化しているといわれている。科学技術の発展は豊かさをもたらし、社会を発展させてきた。一方で、地球環境問題のような新たな課題を生み、科学技術の進歩についていけないという感情も一般の人々の間には根強くある。専門家に任せきりにするのではなく、一般市民も科学技術に関する社会問題や政策に関心や責任を持ち、議論に参加することは、健全な社会の発展に不可欠である。このような状況において、一般市民の関心を喚起するには、日常生活の延長として、科学技術に触れる機会を増やすのが良いと考えられる。

函館市は総合計画における都市の将来像として「交流都市」を目指している。日本初の開港都市としての歴史を持ち、港湾都市特有の異文化との接触が町の雰囲気を作り上げている。また自然環境としても海や山の自然に恵まれており、それらが一体となって国際海洋観光都市を形成している。この観光活動の一部に科学に関わるイベントを採り入れることができれば、「文化としての科学」への第一歩になる。幸い2009年には函館開港150周年を迎え、様々なイベントが企画されている。この一部として、科学フェスティバルを産官学民が協力して開催し、継続的に運営していく組織を構築することを提案する。

1.3 長期目標

「科学を文化に！」をスローガンとして、日常生活の様々な場面で老若男女を問わず科学的な内容、科学的な考え方に触れる機会を増やす。科学フェスティバルは常設の「科学館」と比べ、可動性を確保できることから、多様な層の人々に接近可能となる。祝祭気分の高揚の効果もある。街中の様々な場所で、人々とのインタラクションを重視した、科学に触れるイベントを多発させることを目指す。

函館における高等教育機関を中心に、函館地域全体が分散型科学館のような機能を果たし、市民の他、観光やビジネスで訪れた人々が様々な機会に科学的に触れる機会を増やす。函館におけるこれまでの歴史的、文化的なイベントの中にも科学技術の視点を盛り込むことも考えられる。交流都市としての函館が持つ歴史、港町としての特性、海や山の自然環境を活かし、それらを情報技術でつなぐ未来志向のイベント・展示を設計・運営する。科学館のような隔離された環境における展示とは一線を画し、駅や公会堂、図書館、バスや電車の中などの「公空間」を利用して日常生活の中に融合し、浸透していく活動となることを目指す。

1.4 当該年度の目標

- (1) すでに存在する観光に関する情報ネットワークに、市内で開催されている科学技術理解増進活動の情報を融合させた情報ネットワークを構築し、運営していく体制を確立する。
- (2) 市内で開催されている科学イベントや体験展示などを充実させ、公空間を利用した情報端末を開発する。
- (3) 2009年から毎年開催する科学フェスティバルの開催準備を行う。
- (4) 科学・地域コミュニケーションを推進する人材の育成講座を、函館市内の8つの高等教育機関が連携した組織で実施する。

2. 当該年度の実施状況

実施体制の整備

運営機関の公立はこだて未来大学を中心に、実行委員会形式の運営組織、「サイエンス・サポート函館」を組織した(図1)。

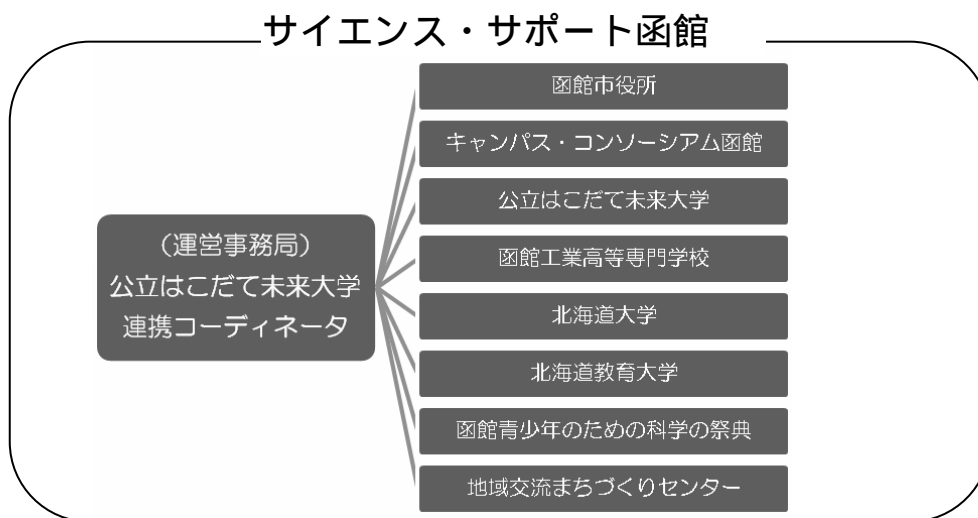


図1 サイエンス・サポート函館組織図

また、主要事業として、情報ネットワーク作りと日常的な科学技術関連企画を推進する地域ネットワーク作りを行う「はこだて科学網」、科学フェスティバル「はこだて国際科学祭」、人材育成講座「はこだて科学寺子屋」の3事業を行う体制を整えた。

個々の実施状況

(1) 情報ネットワークの構築 [はこだて科学網]

観光に加え函館市の市民活動についての情報ネットワークを運営している函館市地域交流まちづくりセンタ

ーと連携し、web サイト「SSH Portal」を平成 20 年 12 月に開設した。まちづくりセンターに寄せられた情報を元に、函館市内と近郊で行われている科学技術理解増進活動の情報発信を行っている。

(2) 展示活動の充実、情報端末の開発 [はこだて科学網]

今年度は地域の科学技術理解増進活動について消耗品や保険の支援を行い(折り紙ヒコーキ教室、サイエンス秋祭り等)、イベントの充実に協力するとともに今後の連携協力を依頼した。参加機関の函館工業高等専門学校では体験型、可搬型の発電展示「函館高専エネルギーラボ」を整備し、随時出前授業や展示見学の受入れを行える体制を構築した。また、JST 支援費外で公立はこだて未来大学が開発した情報端末を 12 月に開催したサイエンス・サポート函館キックオフフォーラムにて展示した。

(3) 科学フェスティバルの開催準備 [はこだて国際科学祭]

青少年のための科学の祭典事務局、函館市地域交流まちづくりセンター等と科学フェスティバル開催に向けた連携協力体制を構築した。平成 21 年 8 月 22 日～30 日の期間に市内の 3 エリアにおいて「はこだて国際科学祭」として大規模な科学技術理解増進活動のイベント群を開催することを決定した。各イベントについては函館市内の高等教育機関や NPO 法人、任意団体を中心に参加協力を求めている。また、サイエンス・アゴラへの参加や平成 21 年に開催される東京国際科学フェスティバルの関係者との会合等により科学フェスティバル開催に向けての調査を行った。

(4) 科学・地域コミュニケーションを推進する人材の育成講座 [はこだて科学寺子屋]

科学・地域コミュニケーションのための人材育成講座「はこだて科学寺子屋」の平成 21 年度からの本格的な講座実施を見据え、今年度は準備講座として 11 月 15、16 日にワークショップ形式の講座を開催した。講座受講者の一部はサイエンス・サポート函館キックオフフォーラムにスタッフとして参加した。平成 21 年度以降の講座について、JST 支援費外にて函館市内の 8 つの高等教育機関からなる連携組織キャンパス・コンソーシアム函館の市民向け講座兼単位互換プログラムとして本事業の支援範囲外にて実施する体制を構築した。

3. 当該年度の成果

(1) 情報ネットワークの構築と稼働 [はこだて科学網]

観光と市民活動についての情報が集中する、函館市地域交流まちづくりセンターと連携し、平成 20 年 12 月に web 上の情報ポータルサイト「SSH Portal」の運営を開始した。平成 21 年度末までに地域に関連した 191 件の科学技術に関連したイベント等の情報提供を行った。運営体制の構築、稼働という点では十分に目標を達成したと言える。SSH Portal 全体のページ閲覧数は平成 20 年 12 月の約 3700 アクセスから平成 21 年 3 月の約 5500 アクセスと数を増やしている。地域に関連した科学技術関連イベント等の情報ページへのアクセス数は平成 20 年 12 月の 278 アクセスから平成 20 年 3 月の 358 アクセスと数を増やしてはいるが、絶対数が少なく、現時点では地域のインターネットユーザーから認知されているとは言い難い状況にある。

(2) 展示活動の充実と情報端末の開発 [はこだて科学網]

参加機関である函館工業高等専門学校において、「函館高専エネルギーラボ」と題した体験型、可搬型の展示物群を整備した。今年度は 4 度の展示を計画していたが、2 度の展示に止まった。今後運用可能な展示物の整備が進んだという点で成果があったが、その運用体制に課題を残した。

地域の組織、団体との連携を広げるため、地域イベント支援として 6 イベントへ保険や消耗品等の支援を行っ

た。内、1イベントは本事業の運営組織サイエンス・サポート函館による主催イベントと協働した企画、3イベントは参加機関である函館工業高等専門学校が主体の企画であった。2イベントは参加機関ではない地域の市民活動団体が主催のイベントに参加機関が協力した。個々の科学技術理解増進活動の充実という点で成果があった。

公空間を利用した情報端末について、その開発は本事業の支援範囲外で行った。運用について、サイエンス・サポート函館キックオフフォーラムにて展示の機会を提供した。情報端末について開発者と利用者が直接コミュニケーションを取れる機会となり、開発者へのフィードバックがあった。

(3) 科学フェスティバルの開催準備 [はこだて国際科学祭]

次年度の科学フェスティバルの正式名称を「はこだて国際科学祭 2009」、テーマを「函館から地球の環境を考える」とし、市内3エリア5会場にて、9日間にわたり12種のプログラムを行う実施体制を整えた。プログラムの対象はエリア毎に一般市民、旅行者、親子とした。プログラムの内容は、科学実験のデモンストレーションを行うセッションの他、芸術に関連したもの、地域の歴史に関連したもの、最先端の科学技術を取り扱うもの、地域の科学技術を取り扱うもの、社会と科学に関連したもの等々、多様な層へアプローチ出来るものを取り揃えることが出来た。

(4) 科学・地域コミュニケーションを推進する人材の育成講座 [はこだて科学寺子屋]

本格的な人材育成講座のプロトタイプングとして、ワークショップ形式の講座を開催し、ノウハウを蓄積した。受講者の多くが翌月に行ったイベント、サイエンス・サポート函館キックオフフォーラムのスタッフとして参加し、人材育成講座と科学イベントの連携を実践することが出来た。

次年度の人材育成講座の実施に向けてはキャンパス・コンソーシアム函館と連携し、本事業の支援範囲外で市民向け講座兼函館市内の高等教育機関学生に対する単位互換プログラムとして実施する体制を整えることが出来た。

4. 外部評価

今年度は事業の初年度で、実質的な活動期間は8月からの8ヶ月間に限られた。外部有識者による外部評価委員会では短期間の活動に対しての評価に代わり、以下に挙げる今後の事業に対しての意見を得た。

- (1) 何を持って成功とするのか、3年間の活動に対して評価軸を設定して欲しい。
- (2) JSTからの支援がおわる3年後の継続性を見据えた活動を行う必要がある。
- (3) 人材育成講座「はこだて科学寺子屋」ではイベントに対しての単なるボランティアスタッフ育成にとどまらない活動を行って欲しい。
- (4) 本事業にて扱う「科学」の範囲について決めておくとうい。
- (5) 市民からのニーズを集めフィードバックする仕組みがあると発展性がある。
- (6) 産業界へもネットワークを広げるとよい。
- (7) webでは地域の人以外にも価値のあるコンテンツを提供して欲しい。
- (8) 外に向けて実行メンバーの顔が見える工夫がほしい。

5. 今後の課題と展開

はこだて科学網の課題と展開

(1) Webによる情報ネットワーク

Webによる情報ネットワークでは、地域の科学技術関連企画の情報を集約したが、現状あまり利用されていない。また地域の人以外に対して価値のあるコンテンツ、実行メンバーの顔が見えるコンテンツの整備が必要である。次年度は集約した情報を活用するためにリニューアルを行いwebサイトの使いやすさを向上させる。また、地域の人以外に対しても価値あるコンテンツとして函館発の科学技術を紹介するものを整備する。さらに実行メンバーを紹介するコンテンツも整備する。その他のWebコンテンツについては更新作業の継続可能性、はこだて科学寺子屋の受講者に対しての実践の場としての活用可能性を踏まえて、コンテンツを充実させていく。

(2) 体験展示や科学イベントの充実

体験型の展示物群、函館高専エネルギーラボを整備したが、その運用は予定通りに進まなかった。地域のニーズに見合った展示の実施形態と、運用者が提供可能な労力を調整する必要がある。今後は函館高専エネルギーラボの運用実績を作りつつ、他機関での展示整備や、他機関との効果的な運用のための連携体制を築いていく。また、地域で行われている科学イベントへの保険や消耗品の支援ではその継続性が課題となる。保険や消耗品の提供を呼び水としてはこだて国際科学祭への出展を促し、科学祭でのつながりによるネットワーク化を目指していく。

はこだて国際科学祭の課題と展開

はこだて国際科学祭のプログラム内容については多様な層にアプローチする、祭に相応しいものが整備出来た。次年度の開催が初回であり運営実務の経験に乏しく、予想外の動員や事故への対応が課題となる。様々なケースを想定し準備することで対応する。

はこだて国際科学祭は年に一度継続的に開催する。内外に対する認知度の向上を図りつつ、参加団体の増加、安定した運営体制の整備をすすめていく。

はこだて科学寺子屋の課題と展開

外部有識者から、人材育成講座を単なるボランティアスタッフ育成にとどめないよう意見があった。この点を踏まえ、集中講座と科学祭スタッフ実務による科学コミュニケーター育成に加え、地域のコミュニケーター教育を兼ねた単発の講座群も行っていく。将来的には、はこだて科学寺子屋の受講者を中心とした人的ネットワークが函館で行われる科学コミュニケーション活動の中心的役割を担う状況を目指す。

その他の課題と展開

(1) 3年間の活動に対する評価軸の設定

外部有識者より、3年間の活動に対して何を持って評価するのかが課題として指摘された。本事業では、はこだて国際科学祭を中心とする科学コミュニケーション活動の安定した運営体制を構築することが最終的な目標となる。運営基盤の整備の状況を評価の主軸として設定する。

(2) 扱う科学の範囲について

外部有識者より、本事業にて扱う科学の範囲を決めておくことが課題として指摘された。本事業では基本的に自然科学、社会科学、科学技術、科学技術政策を扱っていく。また、これらと組み合わせる形で人文科学も扱う。

(3) 市民からのニーズを集めフィードバックする仕組みの整備

外部有識者より，市民からのニーズを集めフィードバックする仕組みを整えると発展性があるとの指摘を受けた。既に実施しているアンケート調査からのフィードバックに加え，市民活動の情報が集積する函館市地域交流まちづくりセンターを中心としたネットワークの中で情報の集積と発信を行っていく。

(4) 産業界へのネットワークの展開

外部有識者より，ネットワーク作りの中で産業界とのネットワーク作りをさらにすすめることを提案された。個別の企業だけではなく，各産業セクターに対して，はこだて国際科学祭やその他の科学コミュニケーション活動への協力を呼びかけていく。

6. 資料編

資料1 活動一覧

: 当該活動に中心となって関わった機関

開催日	開催時間	活動名	開催場所	参加者数	関係機関
2008年 7月31日	11:00- 13:00	第1回実行委員会	公立はこだて 未来大学	9	公立はこだて未来大学, 函館市, キャンパスコンソーシアム函館, 函館工業高等専門学校, 北海道大学, 青少年科学の祭典函館大会, 函館市地域交流まちづくりセンター
2008年 8月4日	15:00- 17:30	第1回地域ネットワーク検討委員会	公立はこだて 未来大学	11	公立はこだて未来大学, 函館市, キャンパスコンソーシアム函館, 函館工業高等専門学校, 北海道大学, 青少年科学の祭典函館大会, 函館市地域交流まちづくりセンター
2008年 8月31日	10:00- 15:00	財団フェスティバル; 青少年のための科学の祭典・函館大会	函館市民会館	5000	函館市文化スポーツ振興財団 青少年のための科学の祭典・函館大会
2008年 8月31日	10:00- 15:00	地域イベント支援: メカニズム・フェスティバル	函館市民会館	500	函館工業高等専門学校
2008年 9月1日	13:30- 15:30	第2回実行委員会	公立はこだて 未来大学	10	公立はこだて未来大学, 函館市, キャンパスコンソーシアム函館, 函館工業高等専門学校, 北海道大学, 青少年科学の祭典函館大会, 函館市地域交流まちづくりセンター
2008年 9月20日	9:30- 15:30	地域イベント支援: サイエンス・秋祭り in 函館高専	函館工業高等 専門学校	500	函館工業高等専門学校
2008年 9月20日	10:00- 15:30	地域イベント支援: 空の日フェスティバル「折り紙ヒコーキ教室」	函館空港ビル	200	函館・青少年の夢と未来を育む会, 函館工業高等専門学校
2008年 12月13日	14:00- 16:00	第1回評価委員会	公立はこだて 未来大学	10	公立はこだて未来大学, 函館市
2008年 10月6日	18:00- 20:00	第3回実行委員会	公立はこだて 未来大学	10	公立はこだて未来大学, 函館市, キャンパスコンソーシアム函館, 函館工業高等専門学校, 北海道大学, 青少年科学の祭典函館大会, 函館市地域交流まちづくりセンター
2008年 11月10日	18:00- 20:00	第4回実行委員会兼第2回地域ネットワーク検討委員会	公立はこだて 未来大学	15	公立はこだて未来大学, 函館市, キャンパスコンソーシアム函館, 函館工業高等専門学校, 北海道大学, 青少年科学の祭典函館大会, 函館市地域交流まちづくりセンター
2008年 11月15, 16日	15:00- 17:00, 10:00- 16:00	人材育成: 短期集中型ワークショップ形式の講座	公立はこだて 未来大学	50	北海道大学, キャンパスコンソーシアム函館, 公立はこだて未来大学
2008年 11月9日	9:00- 12:00	地域イベント支援: 折紙イカ飛行機チャンピオン	函館市立北 原小学校	40	函館・青少年の夢と未来を育む会, 函館工業高等専門学校

		大会			
2008年 12月13日	10:00- 12:00	サイエンス・サポ ート函館キック オフフォーラム	函館市中央図 書館	100	公立はこだて未来大学，函 館市，キャンパスコンソーシ アム函館，函館工業高等専門 学校， 北海道大学，青少年科学の祭 典函館大会，函館市地域交流 まちづくりセンター
2008年 12月8日	18:00- 21:00	第5回実行委員 会	公立はこだて 未来大学	15	公立はこだて未来大学，函 館市，キャンパスコンソーシ アム函館，函館工業高等専門 学校， 北海道大学，青少年科学の祭 典函館大会，函館市地域交流 まちづくりセンター
2009年 1月19日	18:00- 20:00	第6回実行委員 会	公立はこだて 未来大学	10	公立はこだて未来大学，函 館市，キャンパスコンソーシ アム函館，函館工業高等専門 学校， 北海道大学，青少年科学の祭 典函館大会，函館市地域交流 まちづくりセンター
2009年 2月17日	18:00- 20:00	第7回実行委員 会	公立はこだて 未来大学	15	公立はこだて未来大学，函 館市，キャンパスコンソーシ アム函館，函館工業高等専門 学校， 北海道大学，青少年科学の祭 典函館大会，函館市地域交流 まちづくりセンター
2009年 3月14日	10:30- 15:00	地域イベント支 援:ものづくり成 果の体験・展示会	函館工業高等 専門学校	500	函館工業高等専門学校
2009年 3月16日	18:00- 20:00	第8回実行委員 会	函館市中央図 書館	15	公立はこだて未来大学，函 館市，キャンパスコンソーシ アム函館，函館工業高等専門 学校， 北海道大学，青少年科学の祭 典函館大会，函館市地域交流 まちづくりセンター

資料2:連携自治体一覧

なし

資料3:参加機関一覧

(機関名・参画開始時期・住所)

キャンパス・コンソーシアム函館	平成20年8月	函館市
函館工業高等専門学校	平成20年8月	函館市
北海道教育大学函館校	平成20年8月	函館市
北海道大学大学院水産科学研究所・大学院水産科学院・水産学部	平成20年8月	函館市
青少年のための科学の祭典函館大会	平成20年8月	函館市
函館市地域交流まちづくりセンター	平成20年8月	函館市
財団法人南北海道学術振興財団	平成21年3月	函館市

資料4:委員会等

委員会名:サイエンス・サポート函館実行委員会:

本支援事業を実施するための組織，サイエンス・サポート函館の実行委員会という位置づけで，地域ネットワークの検討と，実施実務の連絡調整を行う。当初は地域ネットワークの検討を行う地域ネットワーク検討委員会を別の委員会として設置したが，委員構成がほとんど変わらないため両者を統一した。

委員の構成：

(役職・氏名・所属)

実行委員長	美馬のゆり	公立はこだて未来大学
全体コーディネーター	金森晶作	公立はこだて未来大学
はこだて国際科学祭担当	木村健一	公立はこだて未来大学
経理事務担当	松塚康輔	公立はこだて未来大学
経理事務担当	長島正昭	公立はこだて未来大学
経理事務担当	加藤加奈女	公立はこだて未来大学
提案機関担当	鶴喰誠	函館市企画部企画管理課
提案機関担当	長谷山裕一	函館市企画部企画管理課
アートディレクター	高田傑	東京藝術大学
はこだて国際科学祭担当	渡辺儀輝	青少年のための科学の祭典函館大会
はこだて科学網担当	小林淳哉	函館工業高等専門学校
はこだて科学網担当	本村真治	函館工業高等専門学校
はこだて科学寺子屋担当	渡辺保史	北海道大学
はこだて科学寺子屋担当	榎殿肇	キャンパス・コンソーシアム函館
はこだて科学網担当	丸藤競	函館市地域交流まちづくりセンター
はこだて科学網担当	斉藤貴美恵	函館市地域交流まちづくりセンター
はこだて科学網担当	田村昌弘	NPO サポートはこだて
参加機関担当	鴈澤好博	北海道教育大学函館校
参加機関担当	松浦俊彦	北海道教育大学函館校
参加機関担当	高橋是太郎	北海道大学水産科学研究院
参加機関担当	井尻成保	北海道大学水産科学研究院
アドバイザー	三宅丈夫	株式会社学習研究社

資料5：外部評価委員名簿

櫻井健治	函館商工会議所	常務理事
縣 秀彦	国立天文台	天文情報センター准教授
元村有希子	毎日新聞社	科学環境部記者
山科直子	東京大学	総合文化研究科 特任准教授
杉山滋郎	北海道大学	大学院理学研究院 教授

資料6:外部発表等

(1) 外部発表

招待、口頭講演 (国内 6件、海外 0件)

[口頭発表]

美馬のゆり(公立はこだて未来大学), 科学を文化に はこだて国際科学祭の挑戦 , 平成20年度日本科学教育学会第1回研究会・北海道支部会, 北海道教育大学函館校, 2008年11月

渡辺儀輝(市立函館高等学校), 学校, 地域, メディアを巻き込んだ理科教育の実践, 平成20年度日本科学教育学会第1回研究会・北海道支部会, 北海道教育大学函館校, 2008年11月

[基調講演]

美馬のゆり(公立はこだて未来大学), 多様な層へのアプローチを可能にする科学祭という手法 欧米の事例から , 21世紀型科学教育の創造 , 筑波大学, 2008年12月

[シンポジウム登壇](氏名は関係者分のみ記載)

渡辺儀輝(市立函館高等学校), 松浦俊彦(北海道教育大学函館校), 美馬のゆり(公立はこだて未来大学), 明日を拓く科学教育, 平成20年度日本科学教育学会第1回研究会・北海道支部会, 北海道教育大学函館校, 2008年11月

西尾正範(函館市長), 美馬のゆり(公立はこだて未来大学), 科学で街を元気に! 科学フェスティバルは地域を活性化できるか?, サイエンスアゴラ2008, 日本科学未来館, 2008年11月

金森晶作(公立はこだて未来大学), パネルディスカッション「地域ネットワークの力で理科離れに立ち向かう!」, サイエンス・コミュニケーションフォーラム in 愛知, トヨタテクノミュージアム産業技術記念館, 2009年3月

ポスター発表 (国内 2件、海外 0件)

美馬のゆり(公立はこだて未来大学), 「町おこし」型科学技術理解増進活動の調査研究, 21世紀型科学教育の創造 , 筑波大学, 2008年12月

美馬のゆり(公立はこだて未来大学), 国際交流都市函館の地域ネットワークを活かした科学文化の醸成, 21世紀型科学教育の創造 , 筑波大学, 2008年12月

(2) 新聞報道等

毎日新聞, 2008年10月19日(日曜日)朝刊, 理系白書08:美馬のゆり・公立はこだて未来大学教授へのインタビューを元に構成された記事が掲載。地域に根ざした科学コミュニケーションイベントの展開について。

北海道新聞, 2008年11月8日(土曜日)朝刊道南版, 大人も楽しめる科学祭!: はこだて国際科学祭の紹介記事

函館新聞, 2008年11月15日(土曜日)朝刊, 集まれ! 科学技術の伝達者
: 人材育成講座開催について

北海道新聞, 2008年11月16日(日曜日)朝刊道南版, 日曜トーク はこだて国際科学祭の運営組織のコーディネーター: サイエンス・サポート函館の活動について, コーディネーターに対してインタビューした記事

函館新聞, 2008年11月17日(月曜日)朝刊, 「科学の魅力」どう伝えよう 未来大で人材育成講座:

人材育成講座の報告記事

函館新聞，2008年12月5日（金曜日）朝刊，「サイエンス・サポート函館」発足 科学の楽しさ知る喜び発信：サイエンス・サポート函館の発足と12月13日開催のキックオフフォーラムの紹介記事
一面トップ記事

北海道新聞，2008年12月10日（水曜日）朝刊道南版，科学の面白さ知ろう サイエンス・サポートが13日に函館でフォーラム：サイエンス・サポート函館キックオフフォーラムの紹介記事

函館新聞，2008年12月14日（日曜日）朝刊，サイエンスサポートのフォーラム「科学」で函館活性化：12月13日開催のサイエンス・サポート函館キックオフフォーラムの報告記事

北海道新聞，2008年12月16日（火曜日）夕刊道南版，科学をテーマにフォーラム：12月13日開催のサイエンス・サポート函館キックオフフォーラムの報告記事

北海道新聞，2009年2月22日（日曜日）朝刊，古き函館の写真ネットに：函館マルチメディア推進協議会によるイベントが「はこだて国際科学祭」にて行われることを紹介

北海道新聞，2009年3月12日（木曜日）夕刊道南版，拝啓ふるさと 建築家 高田傑さん：高田傑さんのはこだて国際科学祭のアートディレクターとしての活動とそのデザインにかける想いを紹介

北海道新聞，2009年3月15日（日曜日）朝刊道南版，科学の楽しさ子供たち体験：函館高専にて開催された「ものづくり成果の体験・展示会」の報告記事

函館新聞，2009年3月15日（日曜日）函館新聞，ロボットや実験装置ものづくり成果披露 函館高専で展示会：函館高専にて開催された「ものづくり成果の体験・展示会」の報告記事

（3）テレビ，ラジオへの出演

FM いるか「週刊まち日和」，2008年11月14日放送，コーディネーターの金森がゲスト出演し本事業の取組みと翌日に行われた人材育成講座について紹介

FM いるか「週刊まち日和」，2008年12月12日放送，コーディネーターの金森がゲスト出演し翌日に開催されたサイエンス・サポート函館キックオフフォーラムについて紹介

FM いるか「暮らしつづれおり」，2009年2月5日放送，コーディネーターの金森が人ネットワークのコーナーにゲスト出演，本事業の取組みとはこだて国際科学祭について紹介

資料7:成果資料等

1)はこだて国際科学祭ポスター B0版



2)web サイト「SSH Portal」

<http://www.sciencefestival.jp/>



3)Web テンプレート (次年度のリニューアル時に使用予定)



4)体験型かつ可搬型の発電に関する展示物群「函館高専エネルギーラボ」

